Bulletin of Faculty of Education, Nagasaki University : Curriculum and Teaching No.49（2009）61-70

大学の生活科教育における都市公園利用に関する実践研究

～四季を通じた活動による学習効果～

富山　哲之*
（平成 20 年 10 月 31 日受理）

A Case Study about the Use of the City Park
in the Life Environmental Education of the University
～ For Seasen Program Focuses on the Efficiency of Learning ～

Noriyuki TOMIYAMA*
(Received October 31, 2008)

１．はじめに

近代の都市型社会の進展に伴って、特に都市域への人口流入が急速に進み、都市空間の拡大が続き大規模な環境改変が行われている。そのような中で、都市の公園は、都市域の住環境の改善に大きな役割を果たしていると考えられている[1)]。広い都市公園では、自然豊かな公園緑地の存在が期待できるし、様々な施設等の利用が可能である。また、利用者のライフステージに応じて豊かな活動や体験の展開が期待される。学校教育において、子どもに対する生活科教育の場として公園等を利活用できる可能性がある。だが、現実に公園等の公共施設の活用において、社会科見学や遠足行事での利用に限られており、生活科学習の場として必ずしも十分に活かされていないと思われる。

これまで、公共施設の利用については、生活科が導入されて以来、小学校生活科の指導事例[2)]として取り上げられてきた。生活科学習の取り組みに関する調査報告[3)]によれば、地域環境の違いや学校規模の違いにより、公共施設についての学習は指導のしにくい内容であることが指摘されている。平成 20 年 3 月に告示された新学習指導要領の生活科[4)]の公共物や公共施設に関する内容(4)項によれば、「･･･を利用し」、「身の回りにはみんなで使うもの」等の文言が付け加えられた。実際に様々な施設を利用する中で、物や施設の人々との関わりから、利用の仕方等について考えさせることを重視している。今後より一層の“知的な気付き[5､6)]”を深める指導が求められている。

大学の教員養成課程においては、生活科の目指す具体的な活動や体験を重視し、意欲的に学習を展開するに足る力量を大学生にどこでどのように身に付けさせるかが大切な課題と考えられる。筆者は、前報[7)]で生活科教育科目の 2007 年度前期の受講生らが長崎市の

*長崎大学教育学部理科

平和公園で春季と夏季に行った野外活動について報告した。本報では、同科目の 2007 年度後期の受講生らが平和公園で秋季と冬季における野外活動の特長を明らかにし、前述の前期の受講生らの活動との比較を行い公園利用に関わる授業実践の有効性を明らかにすることを目的とする。

２．授業実践の概要

２・１　研究の対象

本学部初等教育コース１年次の生活科教育科目は、2007 年度前期の第Ⅰクラス（受講生 62 名）と後期の第Ⅱクラス（受講生 74 名）を対象に開講された。第Ⅰクラスの平和公園“願いのゾーン”での春季と夏季の授業実践については前報[7]で述べた。本報では、第Ⅱクラスの平和公園“願いのゾーン”での秋季と冬季の授業実践の結果に基づき前述の第Ⅰクラスの授業実践の結果とを比較検討する。

２・２　授業実践の時期と内容

本授業計画では、後期において開講される授業の中で、平和公園を利用した野外活動を 2007 年 11 月 15 日と 2008 年１月 24 日に行った。本授業は次の（１）から（４）の４単位時間で構成される。（１）「平和公園を知ろう」、または「平和公園で遊ぼう」を主題にした学習活動案を受講生のひとり一人が作成する。学習活動案に基づいて活動内容ごとに１グループ６人程度に受講生を割り振り 11 グループを構成し、それぞれのグループでリーダーを決める。野外活動を行うにあたり安全指導は欠かせないので簡単な実験を取り入れて往復路の交通安全に対する喚起を図った。（２）秋季の平和公園でグループごとに活動した。１単位時間の半分は大学と公園間の往復、及び公園に集合したときの全体説明の時間とした。平和公園での正味の活動時間は 45 分間とした。リーダーは当該グループを小学校の１クラスと想定して活動中は教師役に徹することとした。（３）各グループは、秋季の平和公園で活動して調べたことや分かったことを学習発表会で発表した。（４）前出の秋季に活動した同じグループ構成でもって冬季の平和公園で活動した。前項（２）、（４）の活動レポートについては、全ての受講生に公園での活動を振り返り、気付き、考察、感想等を自由に記述させた。

２・３　記述の分析

前出の活動レポートの記述内容を分析対象とした。記述内容を読み返し要約した上で、類似する内容を纏めカテゴリー化して名称を付けた対象物の分類を行った。記述内容のカテゴリー分析[8]によれば４項目のカテゴリーが示されており、拙稿では、生活科の特質として“比較[9]”の要素を考慮した。依ってカテゴリーとして、（A）公園の現状に対する理解、（B）秋と冬の公園の比較、（C）事象に対する疑問、（D）応用的な発想、（E）自発的な行動への喚起の５項目を挙げて受講生のレポートの記述内容を分析した。

３．授業実践の様子

３・１　秋の平和公園における活動

各グループから提出されたレポートに見る活動の詳細を以下に示す。本時の学習活動案

の題目ごとに分類している。

3・1・1　主題「平和公園で秋を見つけよう」の実践

第１グループは公園の紅葉したイチョウやケヤキ、モミジ等の樹木の下で色鮮やかな落ち葉を採集した。生き物のハチやチョウを見つけたことや学校と公園を往復する際の交通安全に配慮したこと等を記述している。

第３グループは季節の変化を体で感じ取り絵日記に表したり、採集した落ち葉やドングリで物作りをした様子が伺える。

第４グループはドングリやマツボックリ、落ち葉等を採集することを通して秋を体感できた様子が伺える。

第５グループは公園の樹木に関心を持つとともに落ち葉や木の実等を採集してクリスマスツリー作りをした様子が伺える。

第６グループは公園の四季の中で秋の素晴らしさを理解することができたという趣旨の記述をしている。

第７グループは秋のイメージを話し合い、それぞれが考えたものを採集したり、絵地図で表現した様子が伺える。

第８グループは公園を散策する中で多くの種類の落葉樹を探して色とりどりの落ち葉があることに気付いた様子が伺える。

3・1・2　主題「平和公園を知ろう」の実践

第２グループは公園で採集したドングリやマツボックリを使って物作りをしたり、平和にまつわるものを観察・学習した様子が伺える。

第９グループは公園を散策することの楽しさを友達に伝えたり、公園を訪れた人達と会話を交わす等の活動の様子が伺える。

第 10 グループは身近な公園に関心を寄せ、私達の住む町・長崎に愛着を持つことをねらいとして公園をきめ細かく見て回った様子が伺える。

3・1・3　主題「平和公園で遊ぼう」の実践

第 11 グループは公園でメンバーと遊んだり、公園見学に来た小学生らの行動を観察することにより、公園利用のルールやマナーについて考えた様子が伺える。

3・2　秋の平和公園における活動記録

平和公園で活動した翌週に学習発表会を行った。各グループは、模造紙に描いた公園の概略図または絵地図に、木の葉や木の実、モニュメントの写真等を貼り付け、説明文を記入した掲示物を作成した。１グループの発表時間は７分間としてグループのひとり一人がリレー方式で発表した。

3・2・1　主題「平和公園で秋を見つけよう」に関する発表

第１グループは公園の概略図に樹木や落ち葉等の絵図やドングリのコマや黄色いイチョウの葉で作った造花等の写真を展示した。

第３グループは公園で観察したイチョウ、ケヤキの落ち葉やカシの実、カマキリの卵等の絵図を使った絵日記で展示した。

第４グループは紅葉が始まった樹木や落ち葉、木の実の写真を展示した。

第５グループは落ち葉や赤いトベラの実、マツボックリ等で作ったクリスマスツリーを

展示した。

第 6 グループは公園の概略図に木の葉や木の実の写真を展示した。

第 7 グループは公園で採集した木の葉や木の実の実物や絵図を展示した。

第 8 グループは公園の概略図に紅葉したイチョウやケヤキ、モミジの落ち葉の実物を貼り付けて展示した。

3・2・2　主題「平和公園を知ろう」に関する発表

第 2 グループは公園の概略図に 12 種類の樹木の場所や幾つかのモニュメントの場所を示した。また、木の実で作ったコマを回したり、笛を鳴らす等の演示をした。

第 9 グループは公園で見つけた樹木や木の実の特長を絵図や写真で示した。観光客や公園を清掃している人達と会話を交わしたりしたことについて述べた。

第 10 グループは公園の樹木や草花の様子、人々の様子を観察し写した写真を展示した。また、公園の美化に努めている人達への心配りが見られた。

3・2・3　主題「平和公園で遊ぼう」に関する発表

第 11 グループは公園の季節感のある樹木やモニュメントの絵図や写真を組み合わせてカルタ形式にして展示した。

平和公園には平和祈念像や各国から寄贈された多くのモニュメントがあるがそのような人工物への関心よりも落葉樹の紅葉が始まり色とりどりの自然物への関心が上回っていたようである。グループの仲間と関わりながら、公園の樹木の周りで採集した落ち葉や木の実等を使って物作りをしたり、公園の自然を題材にしたカルタ作りをする等の発表のための工夫が見られた。

3・3　冬の平和公園における活動

3・3・1　主題「冬の平和公園～秋の平和公園と比べよう～」の実践

秋に平和公園を訪れた頃とは雰囲気が随分変わり冬の公園広場の人影は疎らで冷たい北風が吹き抜けていた。受講生らは、秋の活動で辿った経路をグループ別に公園を探索する中で、冬に咲く花を見つけたり、小枝の先に冬芽を見つけ木の芽の芽吹く春の兆しに気付いた。

各グループのひとり一人から提出されたレポートの記述内容は様々であるが、その中で最も多かったのは、落葉樹の紅葉から落葉への変化に気付き季節の移り変わりを強く認識できたことである。記述内容の事例として、「今回の活動を通して、普段気にとめることもなかった季節の変化を見ることができたのはよい経験になった。･･･ 今後も季節の移り変わりに気を付けていきたいと思う。」、「赤い木の実は今後どうなるのか子ども達に予想させてから再び観察しにくると、興味を持って観察できるのではないかと考えた。」、「二度の平和公園での活動を通して、実際に子ども達を連れて行ったらどういう反応をするだろうかと考えながら自分的にイメージすることができてよかったと思った。」、「秋には見られなかったサザンカやウメの花が咲いていた。」、「違う形で冬を越そうとするカマキリの卵を見つけた。」等が挙げられる。落葉樹の葉っぱの色が変わることに疑問を持ちどのような条件であれば紅葉が始まるのかについて調べたり、ツバキ科のサザンカとツバキの相違点について、または、ヒガンバナの名称の由来等について調べていた。公園の樹木の幹に菰巻きされたものがあった。これは害虫の食害防止や防寒のため、幹からの発芽の促

進、樹皮の保護のためである。受講生の記述内容に、「虫が木を害するのを防ぐために、暖めて虫を集め、冬が過ぎると取り去る。」とあり幹巻きに気付いたことが分かる。

長崎平和公園総合案内図を**図１**に示す。長崎市の平和公園は、平和祈念公園、爆心地公園、運動公園等で構成されている長崎の基幹公園（面積約 19ha）である。平和祈念像のある平和祈念公園（願いのゾーンと呼ぶ。）と国道を隔てて爆心地公園の慰霊施設、国立平和祈念館、原爆資料館、及び運動公園の各種のスポーツ施設等がある。2007 年 11 月に実施した秋の平和祈念公園における学習活動の様子を**図２**に示す。学習発表会ではグループごとに掲示物等を作成して発表した（**図３**）。2008 年 1 月に実施した学習活動の時の公園広場の様子を**図４**に示す。広場の人影は疎らである。平和公園には植栽された多くの種類の樹木がある（**図５～図７**）。平和公園の冬を彩る樹木には、赤い実が鈴なりのクロガネモチ、冬に花を咲かせるサザンカやウメ、翼果をつけたモミジ等が見られる。被爆から 60 年余、公園内に植栽された多くの種類の樹木が成長し自然林のような景観をなす所もある。このような公園緑地には様々な生き物が棲息し、また人々の安らぎの場、癒しの場でもある。季節は移り変わり、被爆地・長崎は 2008 年 8 月 9 日、63 回目の原爆の日を迎えた。平和祈念式典前夜、平和を願うロウソクの灯火がともる中、市内の小中学生らの平和コンサートが行われた（**図８**）。市内の小中学生らが作った約 5500 本の万灯が公園内に並べられた（**図９**）。

図１　平和公園総合案内図

図２　秋の公園における活動

図３　発表会の掲示物

図４　冬の平和公園広場

図５　クロガネモチ

図６　サザンカ

図７　モミジ、ウメ（後方）

図８　平和祈念式典前夜

図９　万灯籠

４．授業実践の結果

第Ⅱグループの平和公園での活動レポートの記述内容を分析対象とした。記述内容を読み返し要約した上で、類似する内容をまとめてカテゴリー化して名称を付けた。対象物の分類を**表１**に示す。数値は人数である。

表１に示すように、秋季と冬季の公園活動を通して、受講生全員が自然の変化を比較の対象としたことが分かる。また、変化をもたらす事象として、紅葉（約 91 %）、落葉（約 88 %）、気象（約 26 %）、服装（約 16 %）を挙げていることが分かる。

表１　レポートにみる対象の分類

名　　称	数	名　　称	数	名　　称	数
平和祈念像	7	平和の泉	1	服装	12
気象	19	空の色	1	自然の変化	74
紅葉	67	落葉	65	カマキリ卵	7
ガ	2	チョウ	1	ハチ	1
スズムシ	1	コオロギ	1	メジロ	3
ハト	2	トリ	1	ネコ	3
マツボックリ	20	ドングリ	35	タンポポ	13
シバ	6	ススキ	2	パンジー	1
ヒガンバナ	1	サザンカ	23	ヤマモミジ	15
イチョウ	13	ウメ	11	トベラ	6
ツバキ	5	マツ	4	カエデ	3
サクラ	2	クロガネモチ	2	ナンテン	2
アジサイ	1	キョウチクトウ	1	ビワ	1

落葉樹のイチョウの黄葉やヤマモミジの紅葉から落葉という変化に受講生の約９割が関心を持ったことが分かる。常緑樹のカシやマテバシイは緑の葉に覆われているが秋にはドングリの実が色付き落果する。林の中の落ち葉に埋もれたドングリは冬まで残っているので採集できる。受講生の約 47 %がドングリに着目している。また、冬に花を咲かせるサザンカに約 31 %が着目している。タンポポは冬でも黄色い花を咲かせているのを見かけるようになった。約 18 %がタンポポに着目している。キョウチクトウは野山の危険植物として講義の中で取り上げていた。夏日に映えるピンク色の花に覆われたキョウチクトウは強烈な印象を与えるが、秋には花期が終わり木の葉だけのキョウチクトウへの関心はかなり低いことが分かる。秋の公園では落葉樹の紅葉が最も印象深い事象であるのに対して、冬の公園では落葉した樹木が目につき寂しい印象を受けたという感想が多く見られた。

記述内容のカテゴリー分析[8)]によれば“理解・疑問・発想・行動”のカテゴリーが示されており、拙稿では、生活科の特質としての“比較[9)]”の要素を加えて分類した。次のように、（A）公園の現状に対する理解、（B）秋と冬の公園の比較、（C）事象に対する疑問、（D）応用的な発想、（E）自発的な行動への喚起、の項目名を付けて受講生らのレポートの記述内容を**表２**に纏めた。レポートの記述内容を分類した結果、項目（A）の割合は 100 %でありすべてが公園の現状を理解し、項目（B）では全体の 92 %が秋と冬の

季節の比較をしている。何れも公園の人工物や自然物、生き物を題材とすることで、受講生の大多数は公園の現状に対する理解や秋と冬の季節の比較を行うことができたものと推察される。項目（C）、及び（D）、（E）はそれぞれ 18 %、15 %、24 %の割合であり総じて低い傾向が見られる。

表２　公園活動レポート記述内容のカテゴリー別人数

記述内容のカテゴリー	受講生数
（A）公園の現状に対する理解	74
（B）秋と冬の公園の比較	68
（C）事象に対する疑問	13
（D）応用的な発想	11
（E）自発的な行動への喚起	18

次に、**表２**の項目（A）～（E）に該当する記述内容の文例を「　　」内に抜粋して示す。

項目（A）;「平和公園には、散った落ち葉やゴミを集めている人がいた。たくさんの木々があり、たくさんの落ち葉が落ちているはずなのに、毎日公園がきれいに保たれているのは、そういった人たちが掃除してくれているおかげだな、ということを改めて感じた。」

項目（B）;「秋の平和公園の雰囲気は紅葉などのいろどりが豊かで暖かい印象を受けたが、冬の公園は樹木の落葉や枯れた芝生の生気のなさと北風が冷たいさびしい季節であることを実感した。」

項目（C）;「小学校低学年の児童にとっては、“冬に落ち葉がない”ということまったくの謎である。好奇心旺盛な小学校低学年の児童は“なぜ？”という疑問を抱き、そうである理由を“知りたい”という考えに行きつくはずである。」

項目（D）;「冬になると気温の低下と日照不足で植物の光合成機能が低下する。葉の役割は終わり葉は落ちる。植物はぎりぎりまで機能を低下させ春まで生き延びようとする。落ち葉は地上につもり、腐葉土となって地質を改良し、新たな芽生えを支えるのであろう。」

項目（E）;「生活科の活動は遊びに行くこと自体が目的なのではなく、自然からじかに学ぶことに大きな意味があることに気づかされた。これから教師をめざすにおいて様々なことを学んでおかねばならないと感じた。」

今回の平和公園における活動を通して、秋と冬の二回の平和公園を探索して確実に移り変わる季節を体感している。特に際だって体感できたのは自然の変化であり、秋から冬にかけて植物の休眠を経て春への兆しを知り様々な事象の変化について観察している。大勢の修学旅行生や観光客が訪れる平和公園の利用上のルール、マナーにおいても“目配り・気配り・心配り”をすることができた。学習発表会では、グループの活動の様子を概略図や絵地図に実物や写真を貼り付けた掲示物等を使ってポスター発表で表現することができた。発表活動において気付きや分かったこと、自分の思い等を“文章化する・絵に表す・言葉で表す”等により、学習したことをより一層深め、同時に表現力も高めることができたものと思われる。

５．第Ⅰクラス及び第Ⅱクラスの授業実践の比較、及び考察

前期に受講した第Ⅰクラスの平和公園における春季と夏季の活動について前報[7]で述べた。前報[7]の第Ⅰクラスのレポートにみる対象の分類（表１）結果と前項**４**の**表２**の第２クラスの結果を**表３**に示す。

表３　活動時期及びクラス別の対象の割合（％）

対象物		第Ⅰクラス 春と夏の活動	第Ⅱクラス 秋と冬の活動
人工物	祈念式典の準備物	65	0
	祈念像・平和の泉	11	11
	モニュメント	29	0
	遺構	5	0
	服装	0	19
自然	季節の変化	18	100
	気象	0	19
	樹木	100	100
	草花	82	37
	木の実	10	74
	紅葉	0	91
	落葉	0	89
生き物	動物	16	12
	昆虫	98	7
	その他	2	0
総数		275	426
人数		62	74

人工物について第Ⅰクラスの受講生一人当たり平均 1.1 個の対象物を挙げているが第Ⅱクラスは 0.27 個である。自然事象について受講生一人当たり第Ⅰクラスが平均 4.5 個であるのに対して第Ⅱクラスは平均 5.9 個を挙げており、後者が 1.4 個分多いことが分かる。生き物については、第Ⅰクラスは平均 1.0 個、第Ⅱクラスは 0.30 個である。ほぼ 3 倍の違いが見られる。このように、第Ⅰクラスは人工物や生き物への関心が高く、第Ⅱクラスは自然事象への関心が高いことが分かる。

表４には、前報[7]の第Ⅰクラスのカテゴリー分析（表２）結果と前項**４**の**表２**の第Ⅱクラスの結果を示す。

表４　レポート記述内容のクラス別割合（％）

記述内容のカテゴリー	第Ⅰクラス	第Ⅱクラス
（A）公園の現状に対する理解	97	100
（B）春と夏、秋と冬の公園の比較	84	92
（C）事象に対する疑問	15	18
（D）応用的な発想	16	15
（E）自発的な行動への喚起	23	24

表４によれば、第Ⅰクラス、及び第Ⅱクラスのどちらも項目（A）は97％と100％であり平和公園の現状に対する理解は達成できている。項目（B）は両クラスの平均88％に達するが第Ⅱクラスの割合が高い。両クラスとも公園の自然物等の比較により季節の移り変わりを認識できている。項目（C）、（D）、（E）は15％から25％の範囲にあり前述の項目（A）、（B）に比べて極端に低いことが分かる。項目（C）は第Ⅰクラスより第Ⅱクラスの割合がやや高い。事象に疑問を持つことにより明確な課題意識を持てる段階に到達できると考えられる。項目（D）は両クラスともほぼ同じ割合である。視点を変えて原因や根拠を考えることができる段階と考えられる。項目（E）も両クラスともおよそ24％である。受講生の４分の１が本授業実践における学習活動を通して自発的な行動への喚起の段階に達することができたと考えられる。

本授業実践では、平和公園の人工物や自然物、生き物を題材とすることで、受講生の大多数は積極的に学習活動の臨むことができたと推察される。第Ⅱクラスのあるグループは、学習発表会で“平和の泉”の噴水の水飛沫の中に虹を発見したことを写真で示したが、その後提出されたレポートでは虹の現象に関する記述は見当たらなかった。

以上のように公園の探索を通して公園の様子や自然事象に気付かせたり、公園を大切にし綺麗にする等の意識の高揚を図るためには同じ場所に季節ごと繰り返し行くことが効果的であると考えられる。こうした活動や体験の中で生まれる“知的な気付き”を大切にして指導に当たるといった新たな方向性が示唆される。

５．おわりに

本小論では、本学部の生活科教育科目の授業実践における近隣の平和公園の利用に関わる学習活動の具体例を示し授業分析を行った。前報[7)]では、第Ⅰクラスの春季と夏季の公園での学習活動について述べた。当時、2007年８月９日の62回目の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に向けて被爆地・長崎の平和への関心の高まりの中、受講生らの平和への思いが学習活動にもかなり反映されていることが分かった。これに対して、平和祈念行事が一段落した後の秋季から学習活動に入った第Ⅱクラスでは、平和公園の自然物への関心が非常に高いことが分かった。第Ⅰクラス、及び第Ⅱクラスの受講生に対して、季節ごとの２回ずつではあったが、各クラスの受講生らは、グループごとに平和公園を探索し公園の様子や自然の変化に気付き、継続して観察しようという気持ちを学習発表会の発表内容やレポートの記述内容から読み取ることができた。

今後の課題として、学習者の事象への“知的な気付き”を活発にし科学的思考にまで深化させるような支援が必要であると考えられる。

附記

本稿は、日本生活科・総合的学習教育学会第17回全国大会（2008年６月，山形大会）の発表資料に加筆・修正を行い作成したものである。

参　考　文　献

１）千葉県編：県立都市公園整備のあり方調査検討報告書（平成16年３月）12.
２）嶋野道弘、中野重人編著：新しい学力観に立つ授業展開のポイント生活科、東洋館出

版社（1994）47.
3）鈴木悠里、野田敦敬：日本生活科・総合的学習教育学会第15回全国大会発表資料（平成18年6月）31.
4）文部科学省編：小学校学習指導要領解説生活編（平成20年）２.
5）文部科学省編：小学校学習指導要領解説生活編（平成11年）３.
6）朝倉淳、伊藤公一：日本生活科・総合的学習教育学会誌、第11号（2004）84.
7）富山哲之：長崎大学教育学部紀要（教科教育学）第48号（2008）39.
8）佐藤拓哉、更谷隆彦：環境教育、第16巻、第1号（2006）61.
9）峯岸由治：共愛学園前橋国際大学論集（2006）175.